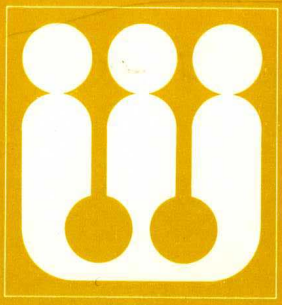
サイゴンからの手紙

饗庭孝典

サイゴンからの手紙

饗庭孝典



NHKブックス ジュニア 2
日本放送出版協会

©1972 Takanori Aeba

饗庭孝典（あえば・たかのり）
昭和８年東京に生まれる。
昭和31年東京外国語大学英米科卒，ＮＨＫに入局。
ベトナム戦争をはじめ，キューバ危機，インド・パキスタン戦争などを現地で取材，その間報道局外信部勤務。現在ニューデリー支局長。

ＮＨＫブックスジュニア ②　　検印廃止

サイゴンからの手紙

昭和47年10月15日第１刷発行
昭和50年２月１日第２刷発行

著　者　饗庭孝典
発行者　浅沼　博

装幀　蟹江征治
印刷
製本　凸版印刷

発行所　日本放送出版協会
東京都渋谷区宇田川町41－１
郵便番号 150 振替東京 49701

落丁本・乱丁本はお取りかえします。

サイゴンからの手紙

母よ

チン・コン・ソン

千年は中国の支配のうちに過ぎ
百年はフランスのくびきにつながれ
そして今　二十年が
一日一日と同胞相討つ血に
　　塗り消されていく
母よ　なにを愛しの子に残せよう
母よ　あなたのあとには
　　悲しみの祖国が泣き残る

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

千年は中国の支配のうちに過ぎ
百年はフランスのくびきにつながれ
そして今　二十年が
一日一日と同胞相討つ血に
　　塗り消されていく
母よ　あなたのあとには
　　死んだ息子たちの骨の山が
母よ　あなたのあとには
　　悲しみの祖国の墓が泣き残る

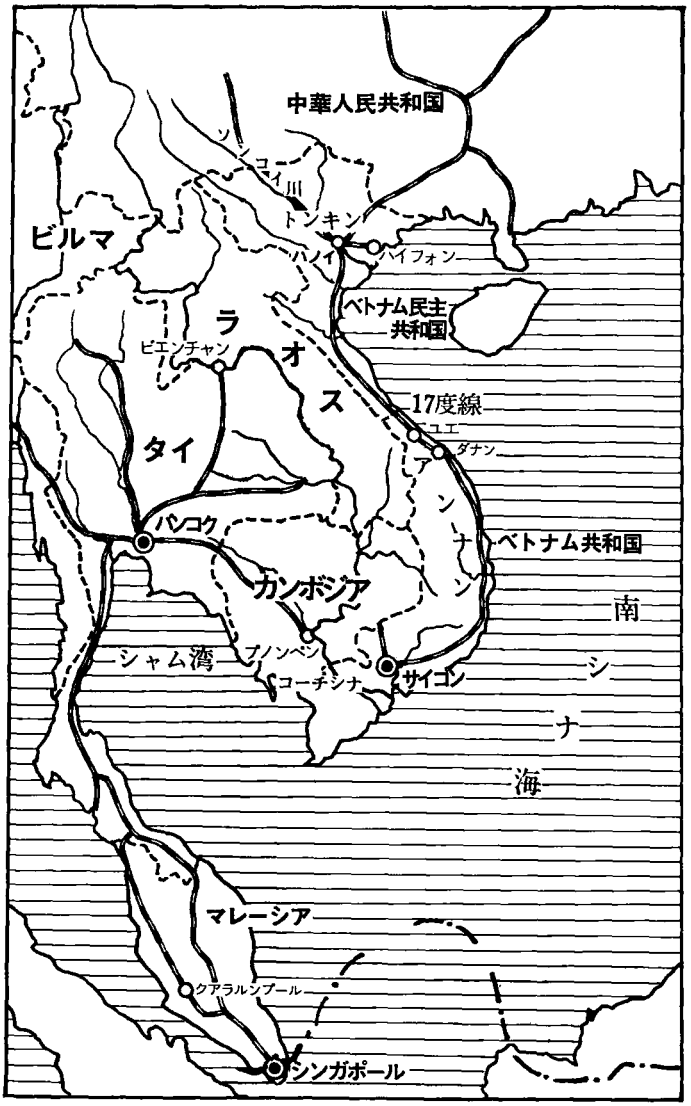
（著者・訳）

目次

第一の手紙　サイゴンの表情……7
第二の手紙　メコン・デルタの農民……23
第三の手紙　タムさんをたずねて……43
第四の手紙　解放軍兵士との対話……60
第五の手紙　長い抗戦の歴史……80
第六の手紙　植民地の苦しみ……96

第七の手紙
独立の戦士たち……111
第八の手紙
戦いの歌……130
第九の手紙
ベトナムの心……150
第十の手紙
静かな日曜日の午後に……171
東京にて……186

★表紙の写真は銃で撃たれた父親を見まもる少女
（撮影　石川　文洋）


中華人民共和国
ソンコイ川
トンキン
ハノイ
ハイフォン
ビルマ
ベトナム民主共和国
ラオス
ビエンチャン
17度線
ユエ
ダナン
タイ
アンナン
バンコク
ベトナム共和国
カンボジア
南シナ海
シャム湾
プノンペン
コーチシナ
サイゴン
マレーシア
クアラルンプール
シンガポール

第一の手紙

サイゴンの表情

A君――

お手紙ありがとう。君の手紙はちょうど一週間目にぼくのところに届きました。

羽田からサイゴンまでは、ジェット旅客機でわずか八時間足らずで着くのですが、それからがたいへんなようです。

なにしろ南ベトナムでは、政府軍と解放戦線が、一〇年以上も激しい内戦を続けています。内戦とは「人民の心」を奪いあう戦いだといわれますが、戦争である以上、兵隊の数が大きく

サイゴンの中心部。朝夕のラッシュアワーには、人と車が身動きできないくらいあふれる。

ものをいいます。

政府軍側は一〇〇万人以上の兵隊を抱えていますし、解放戦線側も二〇万から二五万人の兵士がいるようです。しかも、両方とも、毎日何十人、何百人と戦死者が出ています。補充しなければなりません。総人口が一七〇〇万人しかいない南ベトナムでは、兵隊以外の働き手が足りません。

ゲリラの侵入を防ぐために鉄条網を張りめぐらした郵便局で、手紙の仕分けをする人も、チェーンがはずれそうな古ぼけた自転車に乗って配達する人も、女性や年寄りがほとんどです。

考えてみれば、長いあいだ戦争が続いているこのベトナムで、外国からの手紙がなくなることもなくちゃんと届くということの方が、不思議なことかもしれません。

ぼくが最初にサイゴンを訪(おとず)れたのは、もう一〇年

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

近く前になります。ゴ・ジン・ジエムという独裁者の政権がクーデターで倒れた直後でした。

それから今まで、何回となくクーデターがおこり、ゲリラの攻撃がありました。そのたびに、これでサイゴンも終わりか、といわれたものですが、今もあい変わらずサイゴン政権と解放戦線の戦いは続いていますし、アメリカ兵が目抜き通りをのんびりと買物をしている姿も見られます。

「ベトナム戦争は、どうしてこんなに長く続いているのですか」と、君はたずねてきましたね。むずかしい質問です。特派員として、ベトナム戦争をテレビやラジオで報道しているぼくも、ときどき自分に同じ質問をしています。

ベトナムの戦争が、親子何代にもわたって続いているわけを知るには、ベトナムの歴史やベトナムの人たちの気質を知らなければなりません。

ベトナムは、東南アジアの片隅、インドシナにある小さな国です。でも、それなりに長い歴史と、ベトナム人ならではの物語があるのです。そして、現在ベトナムで行なわれている戦争は、その物語のいちばん新しい一章なのです。

テレビや新聞のニュース報道では、残念ながらなかなか古い歴史をさかのぼっての話はできません。これから君への返事の手紙のなかで、いくつかの話を書いてみましょう。

その前に、「特派員として、どんな毎日を送っていますか」という、君のもうひとつの質問に答えておきましょう。

ぼくは今、サイゴンの中心街から少し離れた住宅地に、一軒の家を借りています。二階建てで、一階が支局事務所、二階が住まいです。ぼくと同僚の記者、それにカメラマンの三人がいっしょに住んでいます。

事務所には、ベトナム人の取材助手、ニュットさんやドアン君たちが毎日出勤してきます。この人たちは、英語とフランス語をかなりよく話せますから、ふだんはぼくも英語で話します。しかし、日本人とベトナム人が英語で話し合うというのはおかしなことです。両方にとって、英語は外国語なのですから、日本語かベトナム語で話すのがあたりまえでしょう。ぼくがベトナムにいることを考えれば、ベトナム語で話すべきなのでしょう。

そう思って、ぼくもベトナム語をいっしょうけんめい勉強しました。今では、買物したり、タクシーに乗ったり、食堂で料理を注文したり、というような日常会話にはこまりません。でも、政治家と政治や経済のことを話したり、田舎に行って農村の生活の細かいことを聞いたりするときには、ぼくのベトナム語ではとてもまにあいません。こういうとき、助手のドアン君は、通訳としても働いてくれるわけです。

ぼくは、一か月のうち半分以上は地方の町や農村に出かけています。自分の目で農民の生活

を見、自分の足で戦場を歩いて、ベトナム戦争のほんとうの姿を確かめようとしています。そのために、戦闘に巻き込まれ、生命の危険を感ずることがよくあります。ついこのあいだも、こんなことがありました。

乗り合いバスで、サイゴンから一〇〇キロほど離れた農村に出かけたときのことです。アスファルトで舗装をした道路の両側は、見渡すかぎりの稲田です。豊かな稔りを感じさせる稲穂のうねりがバスの窓からもよく見え、平和そのものといった風景でした。

突然、大きな爆発音がしたかと思うと、窓ガラスの割れる音がして、バスは急に止まりました。

満員の乗客は将棋倒しになり、あちこちでうめき声や子どもの泣き声がおこりました。ケッケッケッケッとけたたましい鳴き声をあげながら、五、六羽の鶏が、動きのとれない乗客の頭の上をはねまわりました。鶏を入れてあったカゴが、急停車のショックでこわれたのでしょう。

這うようにしてバスをおりてみると、三〇〇メートルほど前の道路に、深さ二メートルあまりの穴がぽっかりとあき、ちょうどそのわきの稲田に、政府軍のトラックが横倒しにとばされていました。

解放戦線のゲリラが、道路に地雷をしかけたのです。地雷には二〇〇メートルほどの電線が

ついていて、稲田のなかにのびていました。ゲリラがそこに潜(ひそ)んでいて、軍用トラックをねらって地雷を爆発させたのです。

トラックの前を走っていた政府軍のジープから、数人の兵隊がとんできました。爆破されたトラックから、重傷を負った兵隊を助けあげ、道路のわきに機関銃を据(す)えつけるころには、ゲリラの姿ははるか遠く、もう豆つぶのように小さくなり、稲田の果てのジャングルに消えようとしていました。

バスにもどってみると、フロントガラスがメチャメチャに割れていました。地雷か、はねとばされたトラックの破片がぶつかったのでしょう。運転手と前の方にすわっていた乗客が、ガラスの破片で顔や手を切って、血だらけになっていました。

地雷の爆発があと何秒か遅かったら、ぼくたちもどうなっていたかわかりません。あぶないところでした。

サイゴンにいるときには、政治家や将軍たちに会って話をしたり、学生たちと議論をしたりします。市場に行って物価の上がりぐあいを調べることもあります。

サイゴンは今、人口三〇〇万をこえる大都会です。

この大都会には、華僑(かきょう)がおもに住んでいるショロン街もあります。

華僑の指導者と話をすることも、情報集めには欠かせない仕事です。ショロンの華僑は、ベトナムだけでなく、ラオスやカンボジアにいる華僑とも連絡をとり合って商売をしているので、各地のできごとがたいへん早く伝わってくるのです。

南ベトナムの首都サイゴンは、かなり昔からサイゴン河に沿った市場町として栄えてきました。

しかし、大都会になったのは、なんといっても一〇〇年あまり前、フランス人がはいってきてからです。フランス人は、ベトナム、ラオス、カンボジアというインドシナ植民地三国を治める中心のひとつとして、このサイゴンに腰をすえました。

ハノイがインドシナ統治の中心だとすれば、サイゴンは商業の中心でした。また、サイゴンの高等中学は、ベトナムだけでなく、インドシナの教育の中心のひとつでもありました。カンボジアやラオスの王様、有力者の子息もおおぜいサイゴンに遊学していました。カンボジアの元国王で、現在北京に亡命しているシアヌーク殿下も、サイゴン留学組のひとりです。

サイゴンの中心街カチナ通りは、石畳の道にタマリンドウの並木がそびえ、石づくりのビルが立ちならんで、パリのシャンゼリゼ通りをしのばせるものがあります。

フランス人たちは、サイゴンを「東洋のプチ・パリ（小パリ）」と呼んでいました。独立後、カチナ通りは自由通りと呼び名が変わりましたが、今もパリに負けないような立派な下水道の

自由（ツゾー）通りの一部。フランス植民地時代のなごりをとどめているしょうしゃな商店街と街路樹。

設備があり、フランス人たちが、サイゴンを自分たちの街として作りあげたことをうかがわせます。

街角のカフェでは、道路のわきのテラスに並べたテーブルで、中国風に白いあごひげを長くのばした老人が、時間を忘れたようにのんびりとコーヒーを飲んでいます。通りのつきあたりには大きなカトリックの教会があり、ヨーロッパ製のステンド・グラスや宗教画がたくさん見られます。そして、その周囲には大統領官邸（かんてい）や外務省など、政府の役所が静かに立ち並んでいます。

教会の裏に続くズイタン通りには、ゴム園の経営で財を成（な）したフランス人が建てたのでしょうか、しゃれた西洋館が続いています。二階のテラスや石づくりの門には、ボンジャイの小さな赤い花がこぼれるように咲き乱れています。

暑い日ざしに、バナナの葉さえたれさがるかと思

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com